

我が家ストーリー第4話 緊急ショートの対応

注:このストーリーはフィクションです。登場人物のモデルもなく、実在の人物とは全く関係ありません。

第4話は、認知機能の低下した高齢者ご本人から見たストーリーという構成です。

地の文は高齢者ご本人(さくらさん)、「」内の文はご本人の娘さん(花子さん)の発言、『』内の文は『ずっと我が家』応援拠点のショート担当職員の発言という設定となっています。

第4話 さくらさん(84歳)の場合

お腹が空いた。もうとっくにお昼なのに…

お昼はまだなの？

「お母さん！何言ってるの！さっき食べたばかりでしょ！」

この人、かあさんだと思ったのに違うのかしら。よく似ているけれど。

私のことを「お母さん」と呼んでいる。何を勘違いしているんだろう。

すみません、お腹が空いているんです。

「だから！！。…もう、いよいよだわ。」

とても怖い顔をしたので怖くなった。急に私の方へ向ってくる。

ガッと両肩をつかまれた。痛い。

「私はあなたの娘！花子でしょ！」

思わず、手で払いのけた。

「痛っ。何よ、お母さんどうしちゃったのよ！」

どうもここは私の家ではないようだ。とても怖い人がいる。

間取りを確かめたが、確かに違う。父と母と兄たちと私が寝ていた部屋もない。

そうだ、カバンを持ってきたはずだ。それを持って家に帰らないといけない。

どうしちゃったんだろ。確かに持ってきたはずのあのカバンが見当たらない。

このタンスの引き出しだったかな。ここでもない。

…**数時間経過**……………

「うわっ、お母さん、何してるの！」

またあの怖い人がきた。しょうがない、また後で探しに来るとして、お家に帰ろう。

「お母さん！ どこに行くの！ もう夕方よ！ もう、どうしたらいいのかしら…」

…その翌日(注①)……………

何だかいいにおいがしてくることに気が付いた。

『さくらさん、もうすぐお昼ですよ』

ここはどこだろう。家ではない。

『さくらさん、お茶でもいかがですか。』

なんだか優しくそうな人から声を掛けられた。

あの一、私は家に帰らないといけないんだけど、どうしたらいいのかしら。

『さくらさんは、昨夜からこちらにお泊りなんですよ。お疲れの様子だったので、しばらくゆっくりしませんか。』

お茶が目の前に出てきた。周りを見渡すと、おばあさん、おじいさんがゆったり座ってくつろいでいる。でも、そろそろ帰らないと…

『では、一緒に出掛けましょうか？ 私が案内しますよ(注②)』

良かった。地獄で仏。ようやく私のことを知っている人に逢えたようだ。

その人がそっと手を握ってくれる。私は必死にその人の腕にすがった。

『こちらが、さくらさんが泊っているお部屋、こちらが玄関です。』

『外もここは気持ちよいので、ご案内しますね。今は、桜が満開に近いのでご近所の皆さんと一緒に
お花見をしています。』

桜！。そう、私は桜が咲くころ生まれたので、両親に「さくら」と名づけられたんだった。

外に出た。目の前に、ほぼ満開の桜の大木がある。

きれいだわ。私の故郷の桜なの。



『そうですか。本当にきれいですね。』

『それはそうと、そろそろお昼です。お召し上がりになりますか？』

桜ももう少し眺めていたかったが、お腹が空いてきた。

この優しそうな人なら、頼んでも高くないかもしれない。

わたし、持ち合わせがないんですけど。

『料金は後払いでいいんですが、昼食代が気になるならご説明しますよ』

この人なら大丈夫そうだ。そう思ったらますますおなかが空いてきた。

…その3日後……

桜を眺めていたら娘の花子がやってきた。

あら花子、どうしたの。こっちへ来て一緒に桜を眺めない？

「お母さん、私ができるの？」

何言ってるの。当たり前じゃない。ここの桜は本当にきれいでしょ。

わたしは、桜が咲いた頃に生まれたから「さくら」なのよ。

「知ってるわよ。子供のころから何回その話を聞いたと思っているの」

そりゃそうだね。ははは。

「良かった…。一時はどうなるかと思った…。」

「こんなに良くなるなんてことがあるんですか？」

『さくらさんは、良くなったというより、生活のリズムが本来のリズムに戻った(注③)ということだと思えます。』

「もう、だめだと思いました…」

『ここの雰囲気を入り込んでいただけのようです。少しずつ定期的なご利用のチャレンジをして、生活のリズムを整えることを考えても良いかもしれません。ケアマネさんにご相談されてはいかが(注④)ですか。』

「そうしてみます。本当に助かりました。」

あの優しい人と娘の花子はなんだか難しそうな話をしている。私はもう少し、この桜を眺めてみよう。

いくら眺めても飽きない。本当にこの桜はきれいだわ…。(終)

☆☆解説『ずっと我が家』 応援拠点で私たちが目指しているケア☆☆

はじめに

第4話は、ご自宅でご家族と暮らしている高齢者が精神的に不安定な状態になり、ご家族のご依頼で急きょ『ずっと我が家』応援拠点のショートステイサービスをご利用になった場面を描いています。

認知症になられる高齢者の数が年々増加している中で、こういったご依頼は近年増加しています。

ただ、一口に「認知症による症状」といっても、その病因（「アルツハイマー型」「脳血管性」等々）はさまざまであり、また、ご本人の周りの環境によっても大きく異なります。

また、実際には、「認知症」ではなく、「老年性うつ病」や「夕暮れ症候群」といった原因で認知症と同じ症状となる場合もあります。

第4話のさくらさんの場合も、緊急にショートステイのご利用がスタートしていますが、この状況では、さくらさんの状態が「認知症」によるものかどうかは確定できません。

このように、十分な情報収集ができない、医療的な情報が足りないまま、緊急にショートステイのご利用がはじまることはよくあります。

こういった場合、ショートステイの受け入れスタッフは、ご家族をはじめとするご本人を取り巻く方々に、普段の状況やご利用前 2, 3 日のご様子について、精神、身体、医療面について、十分に確認させていただく必要があります。

緊急時には、ご家族も精神的に非常に辛い状態となっていることがよくあり、その中でいろいろお聞きすることは大変心苦しいのですが、ご本人に落ち着いた状態を取り戻していただく援助を行うためには、些細なことと思えることでもとても重要です。ぜひご協力いただきたいと思います。

その翌日(注①)

「さくらさん」は、緊急ショート受け入れで昨夕からご利用がはじまった翌日です。『ずっと我が家』応援拠点のショートは、個室 10 室を一つのユニットとした、こじんまりとした空間構成です。

「さくらさん」の「私はどこにいるのだろう」という不安には、**落ち着いた雰囲気の中で、専門職である職員がすぐにお声を掛けられるという環境で、お応えしていく**ことを目指しています。

一緒に出掛けましょうか？ 私が案内しますよ(注②)

『ずっと我が家』応援拠点では、敷地の周りの自然環境を活かし、建物の周りを、自然豊かな遊歩道を整備していく予定です。

ここは、その「自然の力」を利用する場面として、臨機応変に職員が「さくらさん」とともに散歩ができるという場面です。（なお、この桜の写真は、実際の建設予定地にある推定樹齢 100 年を超える桜の木です。）

『ずっと我が家』応援拠点では、科学的ケアの視点でご利用者の状態像を判断し、適切なケアを、適切な場で、専門職スタッフがご提供することを目指しています。このことに自然環境の力も活かしてい

きたいと思っています。

生活のリズムが本来のリズムに戻った(注③)

ケアマネさんにご相談されてはいかが(注④)

「第1話 ショートステイ」で触れたように、根拠を持ったケアの取り組みを、ご家族に説明しているという場面です(ここでは、それほど「根拠」は説明していませんが)。

このように、短期間でご本人が落ち着くとは限りませんが、「**こういった考え方をもって、こういったケアを行った。その結果はこうだった。**」ということを、きちんと記録し、ご家族やその方を援助する他の専門職(ケアマネージャー等)に伝えてまいります。

こういった取り組みを他の専門職や事業所に広げていくことは、ご利用者を支える援助に広がりと深さを生み、根拠のあるケアに繋がっていくのではないかと思います。

2013.1.4 制作・著作 社会福祉法人 上溝緑寿会

※本資料は、社会福祉法人上溝緑寿会が作成したオリジナルの資料です。当法人に許可なく、複製、転用、転載することを厳に禁止します。